

## 国際技術教育プログラムに参加した日本人学生の参加歴や 学年の違いによる興味・関心・意欲の推移に関する調査

### A Study Based on the Interests and Motivation of Japanese Students Taking Part in an International Technical Education Program by Grade Level and Frequency of Participation

グループ名：サレジオ工業高等専門学校 国際言語科

学生氏名<sup>1)</sup>：片山央士

指導教員 教員氏名<sup>2)</sup>：マルケス・ルイス

1) 所属先：サレジオ工業高等専門学校 機械電子工学科

2) 所属先：サレジオ工業高等専門学校 国際研究

日本語アブストラクト：サレジオ工業高等専門学校で行われた国際技術交流会に参加した日本人学生の動機や興味をアンケート調査した。その結果、参加回数や学年によって違いがあることが確認できた。

キーワード：コミュニケーション，国際交流，技術伝達

#### 1. 緒言

2024年2月6日から2月15日の間にサレジオ工業高等専門学校において東ティモール人学生との国際技術交流会が行われた。また、同年2月18日から2月27日の間に同校にてフィリピン人学生との国際技術交流会が行われた。東ティモールとの交流会は、日本と東ティモールを結び、双方の技術を発展させることを目的としたものである。<sup>1)</sup>また、フィリピンとの交流会は、本校の機械電子工学科で実施する「ものづくり体験」を通し、双方の親交を深め、技術を発展させることを目的としたものである。本交流会には、東ティモールからは”Don Bosco Fatumaca”と”Don Bosco Maumali - Maliana”の2校が、フィリピンからは”Caritas Don Bosco School”が参加した。著者らは、本交流会に参加した日本人学生の動機や、学年・参加歴の違いによる外国人学生との交流に対する興味・関心度の調査を目的として交流会に参加した。また、日本人学生が工夫してコミュニケーションが取れているかの検証を行った。この検証のために、日本人学生を対象としたアンケート調査を実施した。本研究発表ではその結果を報告する。

#### 2. さくらサイエンスプログラムについて

東ティモールとの交流会は、サレジオ工業高等専門学校国際交流センター東ティモール日本国際技術教育プログラムが主催し、国立研究開発法人科学技術振興

機構(JST)がもつ国際青少年サイエンス交流事業である、さくらサイエンスプログラム(S2022F0800253)より支援を受けている。さくらサイエンスプログラムは、2014年に端を発した産学官の連携によりアジアを中心とした国々の人々を日本に招聘するプログラムで、6年間で3万人を超える若者が日本を訪れた。<sup>2)3)</sup>このプロジェクトは、JSTによると、「新たな時代の社会を担う、世界の優れた人材を日本に短期間招き、日本の最先端な科学技術や文化に触れることを支援・推進している。」<sup>4)</sup>

#### 3. 調査方法と結果

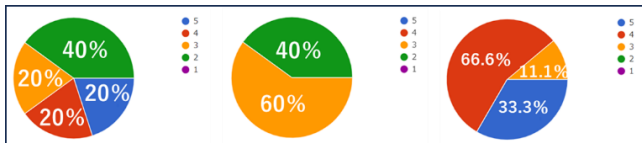
##### 3.1. 調査方法

本研究では、日本人学生を対象にアンケート調査を行った。アンケート作成にはGoogle Formを使用した。アンケートは著者1名を除いた計19名を対象に、12の質問を実施した。そのうち11の項目については5つの選択回答を準備し、選択肢ごとにその傾向を調査した。また、対象者をプレテック生、初参加のテック生、参加2回目のテック生の3つにグルーピングした。

##### 3.2. 調査結果

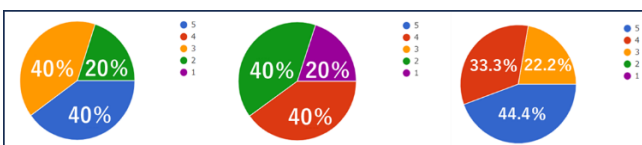
まず、参加動機を調査するための「なぜ国際交流に参加しようと思ったのか」という質問に対しては、全グループを通して最多回答は英語能力の向上であった。また、図①に示す「外国人学生と積極的にコミュニケーション

「コミュニケーションが取れたか」という質問については、プレテック生と初参加のテック生は約半数が否定的な回答をした。それに対し、昨年度も参加したテック生は半数以上が肯定的な回答をした。以上のことから、参加2回目の学生は昨年度の経験を活かしてコミュニケーションが取れたであろうことが伺える。



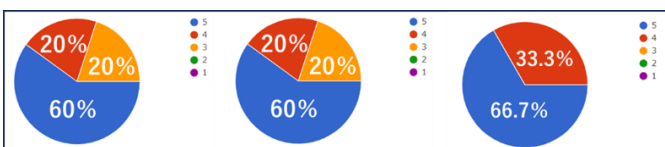
図① 「外国人学生との交流で積極的にコミュニケーションが取れたか」の質問に対する回答

次に、日本人学生の英語能力に関して3つの質問を作成した。「自分の英語力に自信はあるか」という質問については、全グループで否定的な回答が半数を占めた。しかし、参加2回目のテック生のみ肯定的な回答が見られた。他にも、図②に示す「正誤に関わらず相手の質問に答えられたか」という質問については、プレ生と初参加のテック生は肯定的な回答と否定的な回答とに分かれ、一定の傾向は見られなかった。しかし、参加2回目の学生は約8割が肯定的な回答をした。以上のことから、参加2回目の学生は初参加の学生と比較すると、本交流会を通して英語能力や英語でのコミュニケーションに対する自信が向上していることが分かる。



図② 「正誤に関わらず相手の質問に答えられたか」の質問に対する回答

そしてプログラム自体に関する質問について、「今後このプログラムを発展させたいか」、「次回また参加したいか」、「国際交流に関する関心を深めることができたか」という3つの質問の全てについて、全グループで否定的な回答は見られなかった。以上のことから、参加した全員の日本人学生が参加歴に関わらず国際技術教育プログラムに高い関心を持っていることが分かる。



図③ 「国際交流全体を通して、交流に関する関心を深めることができたか」の質問に対する回答

#### 4. 結言

本研究のアンケート結果より、参加した日本人学生は外国人学生との交流に対し、強い興味・関心を持っていることが分かった。またその度合いについては、プレテック生と初参加の学生より参加2回目の学生の方がより高いことが分かった。コミュニケーションについては、他の学生と比較して参加2回目の学生の方が、積極的にコミュニケーションを取れたことが分かった。そして参加した動機に関する回答では、英語能力の向上が最も多かったことから、自身の英語能力に自信をつけたいと考えていることが読み取れる。

ところが、コミュニケーションに欠かせない英語能力に関しては、本交流会に参加した後も、ほとんどの学生が自信をもっていないことが分かった。しかし、参加2回目の学生に限って肯定的な回答が散見されたことから、実際に外国人学生とのコミュニケーションを経験することが学生の自信につながっていると考えられる。そのため、今後も本交流会を継続していくことで、日本人学生の海外に対する興味、外国人学生とのコミュニケーション能力、参加学生の英語力を向上させることができると考える。国際化の進む社会において、このような機会をより多く設けることで、日本人学生が世界で活躍するきっかけを作ることが大切である。

#### 注および参考文献

- 1) Marques, Luis. (2018). "The Sate Building Process in Timor-Leste: A Study of the Theoretical Foundations of Technical Education". Complex Emergencies and Humanitarian Response. Mitsuru Yamada and Miki Honda (eds.). Osaka: Union Press. pp.147-164.
- 2) Japan Science and Technology Agency (JST). (2020). "Sakura Science Exchange Program". Sakura Science Website. (URL: <https://ssp.jst.go.jp/EN/>).
- 3) Marques, Luis. (2021). "The Role of Technical Education in the Process of State-building: The Case of Post-conflict State of Timor-Lest". Graduate School of Social Sciences, Waseda University, Doctor of Philosophy Social Science. Ph.D. Dissertation.
- 4) 国立研究開発法人科学技術振興機構, "概要目的・これまでの実績", さくらサイエンスプログラム, (アクセス日: 2023/4/20) <https://ssp.jst.go.jp/outline/detail/>